

各 関 係 機 関 団 体 の 長 } 殿  
各 病 害 虫 防 除 員

福岡県農林業総合試験場長  
(福岡県病害虫防除所)

令和4年度病害虫発生予報第12号(3月)について

このことについて、病害虫発生予報第12号を発表したので送付します。

予報第12号

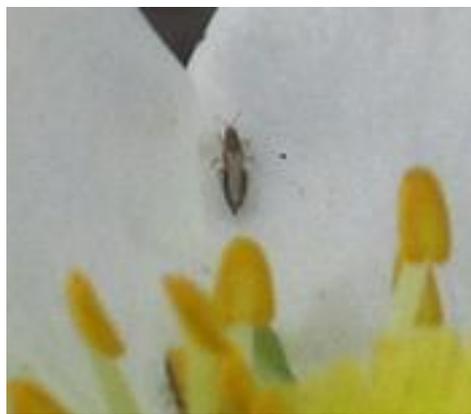
冬春イチゴの微小害虫の防除に努めましょう

2月の冬春イチゴの予察調査では、ハダニ類、アザミウマ類、アブラムシ類の多発ほ場が見られました。向こう1か月の気象予報では、平年に比べ気温は高く降水量は少ないとされており、今後、気温の上昇に伴いこれら微小害虫の急激な増加が懸念されます。

これらの害虫は多発すると防除が困難になるので、気温が上昇する前に防除に努めましょう。



ナミハダニの多発によりクモの巣が張った  
ようになったイチゴの葉



イチゴの花に寄生したヒラズハナアザミウマ

3月における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病害虫名	現況 (発生量)	3月の発生予報 (発生量)	
		平年比	平年比	前年比
冬春イチゴ	灰色かび病 うどんこ病 ハダニ類 アブラムシ類	やや少 並 並 多	やや少 並 やや多 多	並 並 多 並
冬春ナス	灰色かび病 すすかび病 ミナミキイロアザミウマ	やや少 多 少	やや少 多 少	やや少 多 並
茶	カンザワハダニ	多	多	並

注1) 予報の発生量は平年（福岡県の過去10年間）及び参考として前年との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。

注2) 予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。  
それぞれの条件は、少発生（－）、やや少発生（－～±）、並発生（±）、やや多発生（±～＋）、多発生（＋）として示し、＋を総合的に判断して発生量を予想しています。

病害虫防除所のホームページでは、各種病害虫の発生状況を随時更新しています。発生状況の把握や防除の参考にご活用下さい。

○福岡県病害虫防除所のホームページへのアクセス  
URL: <https://www.jppn.ne.jp/fukuoka/> または右QRコード①



○Twitter（ツイッター）で定期情報や警報等発出のお知らせを始めました。  
Twitterの本アカウント（福岡県農作物病害虫情報）へのアクセス  
URL: [https://twitter.com/PPDPO\\_Fukuoka](https://twitter.com/PPDPO_Fukuoka) または右QRコード②



<予想される向こう1か月の天候（令和5年2月25日～令和5年3月24日）>

向こう1か月の気温は、暖かい空気に覆われやすいため、高いでしょう。  
高気圧に覆われやすいため、向こう1か月の降水量は少なく、日照時間は多いでしょう。

向こう1か月の気温・降水量・日照時間（数値は予想される出現確率）

	平均気温	降水量	日照時間
九州北部地方	低20 並30 高50% 高い見込み	少50 並30 多20% 少ない見込み	少20 並30 多50% 多い見込み

（福岡管区気象台 令和5年2月23日発表1か月予報より抜粋）

## 【野菜：冬春イチゴ】

### 1 灰色かび病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 2月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（-～±）。

発病果率 0.01%（平年 0.07%、前年 0.03%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病果、発病葉は見つけ次第速やかに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。

イ 収穫後の果梗枝は、放置すると感染源となりやすいので、早めに取り除く。

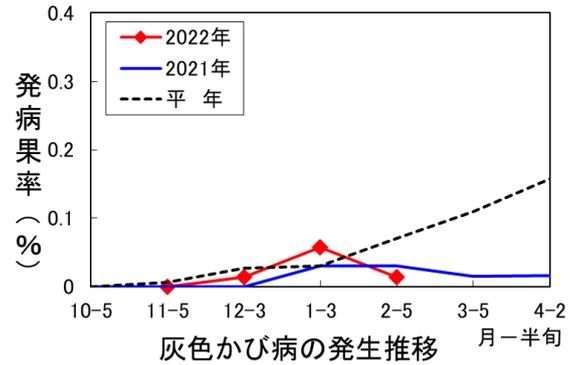
ウ 適切にハウス内の換気を行い、湿度の低下を図る。

エ 病勢が進展すると防除が困難になるので、発生状況に注意し、初期防除を徹底する。

オ 不要な下葉は早めに除去する。下葉かぎ後に防除を行うと効果的であり、薬剤が十分かかるように丁寧に散布する。

カ 同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

キ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p6の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。



### 2 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 2月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

発病株率 0.1%（平年 0.1%、前年 0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病果、発病葉は見つけ次第速やかに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。

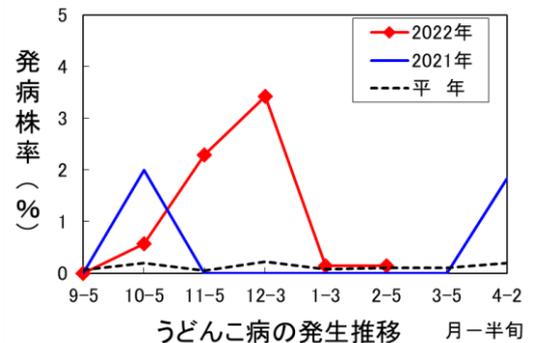
イ 収穫後の果梗枝は、放置すると感染源となりやすいので、早めに取り除く。

ウ 適切にハウス内の換気を行い、湿度の低下を図る。

エ 病勢が進展すると防除が困難になるので、発生状況に注意し、初期防除を徹底する。

オ 不要な下葉は早めに除去する。下葉かぎ後に防除を行うと効果的であり、薬液が葉裏にもかかるように丁寧に散布する。

カ 同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



### 3 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年より多

(2) 予報の根拠

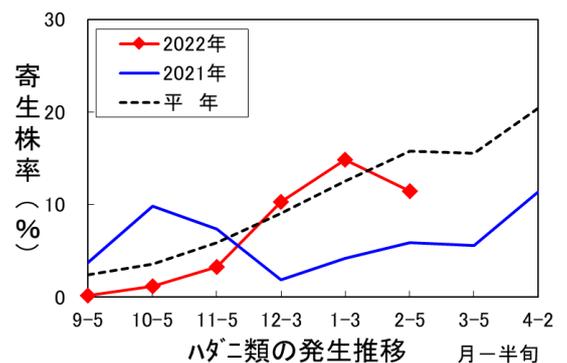
ア 2月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

寄生株率 11.4%（平年 15.8%、前年 5.9%）

イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている（+）。

(3) 防除上注意すべき事項

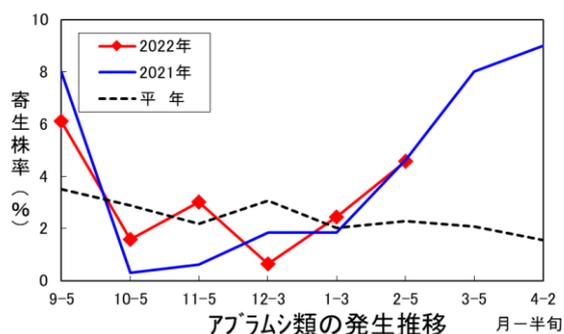
ア ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるので除草を徹底する。除草した雑草や摘葉した葉はハ



- ウス内に放置せず、ビニル袋等に入れて密封し処分する。
- イ 多発後は防除が困難になるので、発生状況に注意し、発生初期の防除を徹底する。
- ウ 薬剤感受性が低下しやすいため、気門封鎖剤も利用し、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
- エ ハダニ類に登録のある薬剤の多くは浸透移行性に乏しいため、葉裏に薬液が十分付着するように丁寧な散布を心がける。防除は摘葉後に行うと効果的である。
- オ ミツバチへの影響が少ない薬剤を使用する。
- カ 化学薬剤だけでは防除が困難であるため、天敵を利用した総合的防除を積極的に実施する。  
 <県ホームページ掲載の「令和5年度版病害虫・雑草防除の手引き」-「IPMの推進」-「イチゴのIPMマニュアル」参照>  
[https://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/life/655576\\_61471952\\_misc.pdf](https://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/life/655576_61471952_misc.pdf)

#### 4 アブラムシ類

- (1) 予報の内容  
発生量：平年より多、前年並
- (2) 予報の根拠
  - ア 2月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)。  
寄生株率4.6%(平年2.3%、前年4.6%)
  - イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている(+)
- (3) 防除上注意すべき事項

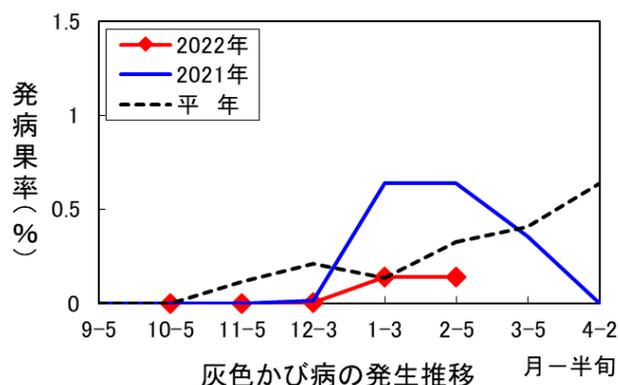


- ア ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるので除草を徹底する。除草した雑草や摘葉した葉はハウス内に放置せず、ビニル袋等に入れて密封し処分する。
- イ 若い葉や未展開葉、花蕾、果房などに寄生していることが多いので、寄生部位に薬液が十分付着するように丁寧な散布を心がける。防除は摘葉後に行うと効果的である。
- ウ 同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
- エ ミツバチへの影響が少ない薬剤を使用する。また、天敵を導入しているほ場では天敵への影響が少ない薬剤を使用する。

#### 【野菜：冬春ナス】

##### 1 灰色かび病

- (1) 予報の内容  
発生量：平年・前年よりやや少
- (2) 予報の根拠
  - ア 2月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-~±)。  
発病果率0.1%(平年0.3%、前年0.6%)
  - イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。
- (3) 防除上注意すべき事項



- ア 発病果、発病葉は見つけ次第速やかに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- イ 不要な枝葉は除去、処分し、通風、採光を良くする。
- ウ 多湿にならないように換気に注意するとともに、ほ場の排水対策も心がける。
- エ 病勢が進展すると防除が困難になるので、初期防除を徹底する。
- オ 同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

##### 2 すすかび病

- (1) 予報の内容  
発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

ア 2月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)。

発病葉率 15.9% (平年 10.4%、前年 1.1%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病葉は見つけ次第速やかに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。

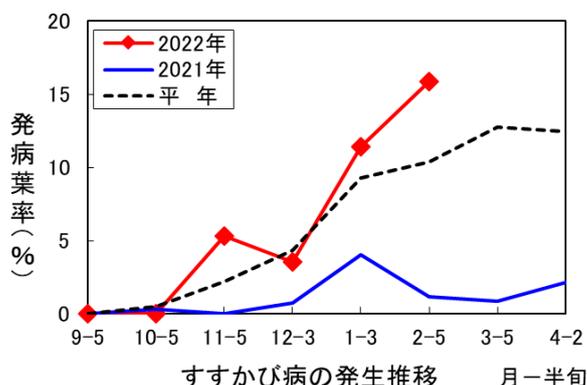
イ 樹勢が低下すると発病が助長されるため、樹勢が低下しないよう肥培管理に努める。

ウ 不要な枝葉は除去、処分し、通風、採光を良くする。

エ 多湿にならないように換気に注意するとともに、ほ場の排水対策も心がける。

オ 病勢が進展すると防除が困難になるので、発生状況に注意し、初期防除を徹底する。

カ 同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



### 3 ミナミキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 2月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

寄生葉率 0% (平年 2.9%、前年 0.7%)

イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている(+)

(3) 防除上注意すべき事項

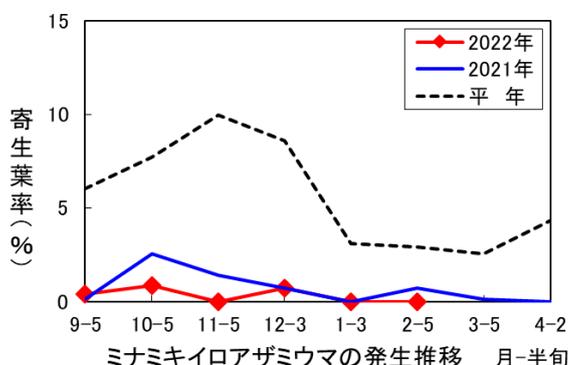
ア ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。

イ 防虫ネットを展張し、定期的な薬剤散布を実施する。

ウ 多発後は防除が困難になるので、発生状況に注意し、初期防除を徹底する。

エ 葉裏への寄生が多いので、散布ムラがないよう丁寧に薬剤散布する。また、薬剤抵抗性の発達を回避するため、同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

オ 天敵を導入しているほ場では、天敵への影響が少ない薬剤を使用する。



## 【茶】

### 1 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年より多、前年並

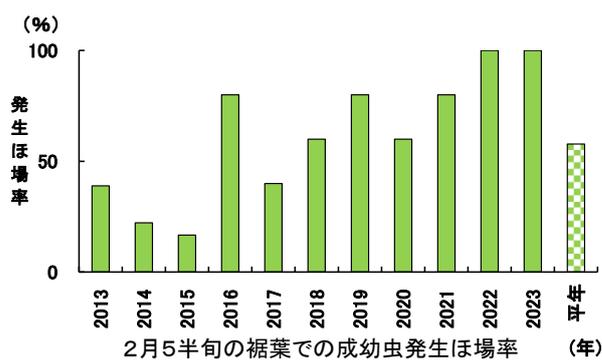
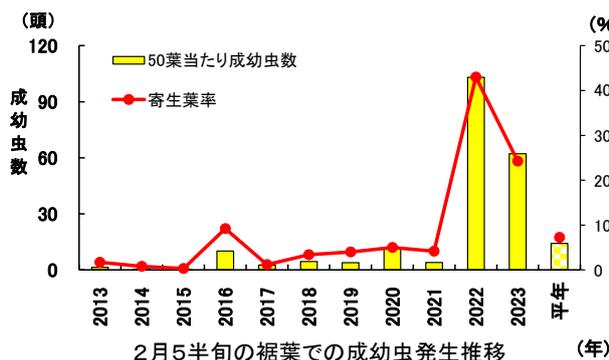
(2) 予報の根拠

ア 2月5半旬調査の結果、裾葉での発生量は平年より多かった(+)

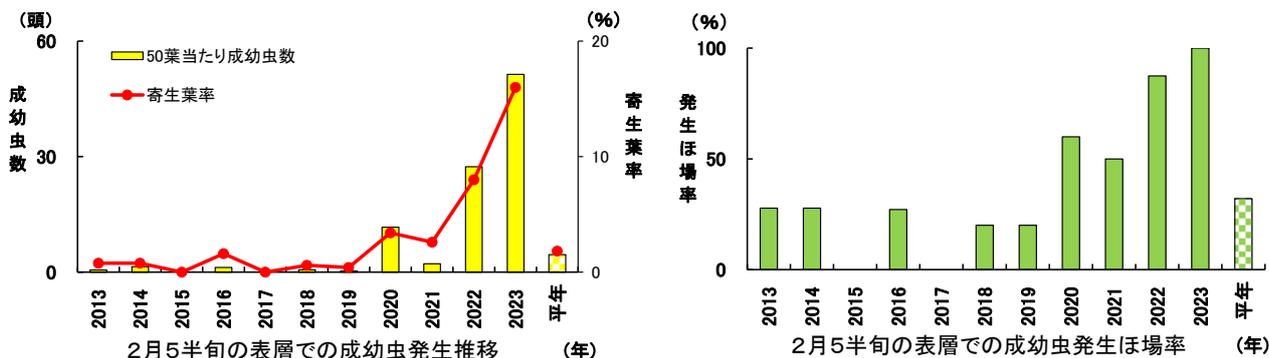
50葉当たり成幼虫数 62.1頭 (平年 14.2頭、前年 103.1頭)

寄生葉率 24.3% (平年 7.3%、前年 43.0%)

発生ほ場率 100.0% (平年 57.8%、前年 100.0%)



- イ 2月5半旬調査の結果、表層での発生量は平年より多かった(+)。  
 50葉当たり成幼虫数 51.4頭(平年 4.5頭、前年 27.4頭)  
 寄生葉率 16.0%(平年 1.8%、前年 8.0%)  
 発生ほ場率 100.0%(平年 32.0%、前年 87.5%)



ウ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている(+)。

### (3) 防除上の注意

- ア 春期の防除適期は孵化幼虫の発生初期である。例年は、平坦地で3月中旬、山間地で3月下旬頃であるが、既に孵化幼虫が見られているため、早めに園の発生状況を確認し防除を行う。
- イ 裾葉、表層ともに発生状況をよく観察し、表層の寄生葉率が2%以上の場合は、卵にも効果の高い薬剤で速やかに防除を行う。
- ウ 薬剤は寄生の多い裾葉の葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。
- エ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

## 農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

### 1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

(例：スミチオン水和剤40は、メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる)

○有効期限切れの農薬は使用せずに、産業廃棄物として処分する。

### 2 飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬(剤型)や飛散が少ないドリフト低減ノズルを使用する。

○散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

○農薬散布の実施において、周囲の生産者、住民に周知を図る。

### 3 保護具の着用

○農薬の散布前に、ラベルの注意・警告マークをよく確認する。マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用し、薬液を作成する。

### 4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄し、残液はほ場外への流出や環境や後作に影響を与えないよう配慮して、ほ場内の農作物が植え付けされていない土壤にまく。

### 5 防除履歴の記帳

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

### 6 空容器の処分

○空容器は、地域の農業用廃プラスチック適正処理推進協議会が実施する回収や、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。また、野焼きは『廃棄物の処理及び清掃に関する法律(廃掃法)』で禁止されているので、絶対に行わない。

